夷國滑稽羽栗毛

全

208
118

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118

ガラス使用

夷国滑稽羽栗毛

208
118

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118

ガラス使用

武州大瀬崎大經師新蔵

夷國滑稽羽栗毛序

羽織整者の天人かゝ着物をかりの當
坂り踊る大鵬は者はまみ〜鞍馬の
稀古赤まゝ〜ん賀宮竜を乗ず一足花
丹〜く富さ塙を結ぶ我友
嬉左の大人此志を姫まを庇ぶ

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118

ガラス使用

一差の草子を作る者て羽栗毛とり
いでや馬首よ馬を作ることも一刎は手傳
よ書くめるや有べき鶴乗者人玉の仲間
たづ見ゆて絲更業稼ぐ新年を待れど
賀ゆて花金玉ゆも かくべく花年
花ゆも信使は祇祷月よも花べよ年

道の中ゆ雪を雪を載ゆ毛ゆ似ゆ花ゆ蒙
陽はくまゆ雪ゆ冬流の水物を有由白年ゆ
四三十世界の大芝居ゆ偶ゆ偶の何ゆ者
密相の皮は化物とのゆ見ゆ
文化第四丁卯の歳ゆ孟春
狂蝶子文麻呂 雀雪撰

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118

ガラス使用

目次

第一回　世中の盛衰田助と亜間の羽をはいてさいちを得る　話
第二回　霄門の花んぶり先生田助を あざむき自て空中を自駆　話
第三回　田助花ぶりを引て空陸を 妹背ふの森修世天狗会の　話
第四回　田助兄文をさづけ初く 東国へ　賢　さる　話
第五回　老婆田助を古石塔婆と ともるよ仙女の国中へ入る　話
後編　第六回より十四まで

東国滑稽羽栗毛初篇

第一回　宇多楽菴嬉丸戯著

今を昔とゐん者。華は東都浅草の邊を。名を田助と喚し放蕩家あり。親の代よりも相応ある商人なりしが。いつとなく次第に家内の都合あしくなりていまハ仕来の商賣も出来兼るゆゑ。住居しゞ。実用倹世を味して朝夕の烟もたえぐなる内くらを。色くと思案して見ても。いつもなき物を。能知恵と。銭金ありとハ思ひ。いづまの

道ゐも金くとだうり。三座の分別ゆゑ出る間もあく。
ゆうしくとおのひ中。むら〳〵間柳が枝としつしハ袋しき
憂川竹の角よりて近所不さ乗る。鏡を受出さうの何の
と正直一通を。源を出もゆゑ宿でゐるとゆきさくるゐ。
ゆゑ形さくるしい事よりう金さん手ゐ弾ゐり手出さ例
ゐありしぞか。我ゐ宿より引くて夜の物ゐよ受出ゐるゐ
あ〳〵しくて見ゐバ格好のよい業耀としよ物。ゐれさく
出ゐる毎間の清。我ハ角さぎの一大ゐ天ゐゐあゐれこが

何ゐとさうゐ物。むら〳〵ハ三百ゐ程ゐを多くの事でゐなし。
我よハ倍場ゐして六百ゐをさづかりさくとハ欲よ目れ
ゐき独ゐこ。ゆら〳〵人間ゐぞで行よゐ家でこゐれ。
日ゐ近ゐよ居ゐるよゐみ。いやといれゐがおトいく
ゐ〳〵。一才八ゐ世親方よ無ゐをいくんと。取物ゐとゐと
何へぞいつさんよ後草ゐ系浦ゐ。一ゐよたゞ金のゐ
をのこゐ会じゐる。まゐりよきゐ手ゐ鉢を見付んと思よ
ゐる。ゐよゐゐゐ物ゐ毎ゐ世ゐ物よ乞ばきく。よしく

の内を人目おほくていとぐちあり。夜みあるてろせーあん
物をし。まづ至山ちう恠くと見はちりてもいまぶ日さし
も高しいつを吉原行く見せをひやうさんと見ひぐ。
いやく待まぐ。叶坂ものぞんでろんを浮寝みはたあり
てち。大郎朱鉢ちも公のとあくとあるひかて。見る角
目の蕚るを待居くるる。径ちく寺内の待耳を鍛ぢし。
楊枝屋のあねさん見せを吉原つくふちる弁当ごとを
荷石介ちあ。お代を屋よけて吉さいくきそたり。

歯みがき豆粉小見せ物ちぐて引とるたそぐ至ありども。
さたくが井ひるぐ人目の多ーて叶ひがくかは見ちとさる
内ち大多陽が小山とあり。四君。亀屋の左手茶ち
ちう。いつそひわつて後学俵ち。吉ーー伝とでむねぐ
焼ちでおらく。叶上焼ち六店軽俵千万いやくあるぐく
寄ぬく。正亜のかくぐち神仏の系どとをかてきけぐ。
熱ハいくひかくあり。正亜蕚書あそ内ーあくあて。小ち
道ていそぎ行。早生六七本ちべーをひく。焼ちち

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118

ガラス使用

のこりあるこう懐中より銭を見るに。十六文不足あり。
少しいそぎ〳〵あるいバ。かりのも和尚ゐるく大銭小銭
五はぜてそこくゝ拝領をも見だしてかけ出さて所を。
家内の者笑ふこうあはり大喰なる者よ茶をほけ
居るゝ者あれど。ゐ〳〵銭を見れば あれでくゝ不足
あり。こゝ引返さあ〳〵追ふけ〳〵。伊の若もあくとく
ら見。男一さゐよ はゝこゝ。たゝく此和尚寺内を
さて出ゝ りきよろく服で見居るせで。めちや

人目のあきを幸ひ所ゐハよく〳〵と大慌大慌をかし抜く。
かの和水弥七郎く行ゝ。一心あめてひきゝ あつとゝ。
見ハ弥の和ゐ柄ゲあゞ。見ゐ出ハ面伯ありとゐろよ
ゐ〳〵 伊がゐ。男ゝ少芸向の落をけく付ゝ。十世ち
ゐるゐせあらゐて。未来ハ和しく地獄の世あ。ゝ見ハ
日ゐ〳〵ゐ書ゝゐ。夜ハ寝ゐ故ゐ今ゐの
ゐ帰りまゝ。伊ゝゐ思ゝゐ。だんゐ〳〵大事ゐ。伊でゐ
むゝやゝゐ和ゲよかゝんと。めつゝ和ゐ和ゐゐ。伊ゐ

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118
ガラス使用

出さるやうにとも。そとよみ〳〵よしさぶせども。小判を
おいて小銭一文出ざれば。あまりの事よ奥さまへ又作
親世話をさい拝して。けるびいひやく立ちなあるあ
れ〳〵有さるを。ちとあぐらよくおぐめ「アヽ俗世ヂヤ
なアと思ふ打〳〵も。鄙通ひの駕籠の数多あまたし。
あのやうな吉原通ひをする人もあり。我ちそれよりくて。
六百両の金がわるさる。二八十六文でまはけらまて。
四五の二十ちりやあまるさわれん。「てもアてるるの

上ヂヤなア。わんはあれがかるくふるあんの事はわけ
ぬ。ありがけんををるとの形りぐ。ホイむぐふぐるわく。
アヽ金がわるなア。さうぢやく。おはけて居てはまるぐ。
石中もせよ。あつちの子ども金ぐよ。少ちもかくみも見ず
ぬ。多ぬ弾と。ひまやくをもつてるく。打バ不量や
墨空ちり。俗よりまるバラく。定く出ちる金まるん。
叶ぬをちぐさばくせんと。まちるひやく打あるし。
あるるはけて梅だり。又上まりはだりくとぬりまる

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118
ガラス使用

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118
ガラス使用

「いやくあいつ人目みかゝゞば一大事。早くひろひ集んと。
笑ひながらひろひ見るに。あちらに金あるこゝろ
思ひの外よくく見まぐ法堂に牺の羽あり。金
羽とおもふに諸説ハかまどもあんぐ数向の新発書
あきまかりしまどもあり。わるう法堂の内まで大笑
の声アハ〳〵と云る氣味ぎと見あるる。
法堂の内より法多高く「コレく田助くるぞよびかふ。
田助なるほどやう。迚も初ぬき。まよ伺ありとも

吟ん物をと。法堂乃迚く立ちりて見るあのくらそ
氣味ろく。だん内りふてらづ屋る。其時又ハ妙ある法
多「やゝ田助。あるもいまだたゞ書りしわ。まつくきけ。
沙を見るかく金くとのゝやせども。まち皆人間界の
のぞむ不よりて。中くたまくハ出来ぬ事あり。まわど
毋金ぐわくハ精出てかゞぐよ。よのてくらお腹る
たゞまを。一船そ仲ちを内け者。あるけてち金ハさづけ
ふくハ屋沢ある。余りの不便さ。金のかたりよ牧ある

羽根をつくしあり。銀のかたりまるはりとしのハ字
ふれども。金は形りまる羽根あるくハ通れ鉄ト からゞ。
不せん ちるけて 蒙ハ出来まゝ。まるまる羽根を
さゞけしあり。毛羽をもつて細工まる羽衣をあらく。
夫を蒙くまる羽根なさば。金まるはたる栗しみあるべし。
兎角人間ハ一生まるぞや。今ゆちゝとてさのゝ栗でも
あくかつゝく苦労おほるべし。風まて吹ちゝまぬ内まる
元あつめくかつるべし。ゆくゝ結ふるまる。チンフイく

トきえゆ「田舞ハ美ミ」あちゝまて
ぜんとしてかくりしがかくてちゝたゞ。先伺まる
ゼよ観音のをくゝみません扇をし。あくまる三枚かゝとみ
み枚。ちひ集くりくり。ゞ家をさゝてゞ栄りる

第二回の話

かくて田舞ハ件の羽を拾かり。かさぎり扇の事あれど。
まづ二階くあげ書て。初ひとりはくゞくかんゞく見るま。
観音の伺告まる。羽衣をあらゝちゝの事あるべし。
一神生ゝ住いての不器用着どくくくよかくちあ

とう〳〵おいつの「ハ、ア」ゆえ中〳〵。是ハ大〳〵美中みありし。
ユヱ〳〵まるげ
ゑ婦か〳〵結らゞおさゞけあさまして下さるのゞあら〳〵。
よくまんあゝぞ。美中のおさゞけのあり〳〵る物ゝぞ
あア　トいつゝゆゞさまゝぶん　あんよ一ア　あん婦ひとりおゝ
あひてハ　ひざつこゞろ
しよても例〳〵だまも笑ひ人もあゝ。かゝいゝ子ゝを
ぶれ　きゝて
雑ぞゆ分〳〵あゝ。をゝ〳〵かゝのよ成ゞ川柳ゞ句
へ
よ。昼をひつてをゝ〳〵くもあき独ゝふよゝいつゝ抱。
ゝゝ　ゞゞよ
ゝゝ〳〵今日ゝ大〳〵ゝゞひまゝ。早く寝ゝ抱ゝゝを

抱〳〵ん　トまゝ〳〵引よせ。誰ゆゝん門の戸を叩く者あり
わりゝゞ
定めて親者さまのお出あゝんと。ゞら〳〵早くありゝのよ
「ほ縛りのゞゞアゞ　田助さん〳〵　モウ四ッるゞのゝ　のゝゝみゞゝ　ゝて目をさまし
アゝ〳〵トあゞゞ「とんゞ事ゞ　羽ゞゝ〳〵抱ゝゝもあんの
ゞゞ　まゞゝ
法ゞ法もあゝ。あゝいけゞゝんゞゝ利生ゝあ　トゝれて
ゞゞもつまゝゞ　ゝゝゞあゝゝ　ゝれて
ゝゝゝゝゝてあゝゝゞまゝと心ゞき　「あんゞゝゝ是ハ羽衣を抱て
ゝんでゝ上の法アゝゝん。さゝて見ゝハ雷門の内へ
出る。ゝねゝゝ抱んゞりかゝゝゝりの親父よゝのむゝ

上方別。まいとひ傳ふこの事あるべ
ト毛ゞあけうあけぬさうを
おやぢゞ「田舎ものゝ親方。おめくよちつと新らしい事ゞ
丞ゝき
あるゞ。まづちよつとはなんで聞たあがかうよ。ひつちも
毎年くつまゝねるだろう。そこで孫たゝ小ハゞ
仙をして膝栗毛出うけやうと。野弘
あゝ是も迂ちゝ小生よちもくぢゝ。是迄金でも
おけつや面白くあり。又金ハあゝよ出来ぬ。金の
かたうよ聞ゝ羽をたんとめひ中ゝのさ。夫わくの

ゝ付ぐゞゝぞおめくよ。アノ羽衣を拾てめゝた。
夫を是て。飛んゞうたゝうゝ一例羽栗毛し出やう
と思ひ出たゞ「おやゝ是ゝ皆ゝ皆でゆゝみ及ぶ。夫を
何ゝりの思ひ付サ。迂年一九ゞ膝栗の大当り。是ハ又
毛上をあた羽栗毛。おなくの出あんゞきめゝ〳〵ト
むさゝよ「田舎も大よ
おやゝ〳〵」のゞまく。そんあゝおめく。一日も早く拾て見て
うんおさく「おやぢ。ぢゝ。ゝゝゞ又教年生お猶ゞ
あゝ。お猶よ大色ひきゞゝる。ぢんゞく茶釜や九ゝ釜ね

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118
ガラス使用

武笠新蔵蔵板

さく四回をめぐらせる程ちねうん羽ぐうさせる拍。
はして羽衣をさせるゝ。おはへひとりハおろうのるゝ。
夫婦ゝとこゝと二三人ゝ羽ぐさるゝ拍。ヤア あんまりても
かゝ味噌だらりにのげゝ不ぐはじまるべ。ちつともゝ
ゝせくやせゝ ト大きくのゝ 田ゆ それゝ ありがてくそんゝ
田の羽をめつくまやせゝ ト ちつくゝ あるゝの 田 あんと
かゝして日ゝちつともゝ ゝくおせくてんてくつゝ
例ゝゝまけぐひやせゝ ゝくゝ ト たの ゝれ 田 おゝぐ ゝ ぐみ

よ〳〵さく　トよんく　さらくさかく〳〵ぐ例のふくそ
ざらくのるすあれば　伊の苦もあく生まあり　○伊ぶ是
ふてハ羽根の性うひやく〳〵　自由まあく〳〵。是るのもぐとひ
ワく〳〵　トかの羽ぐろもみわんぐやくをつけそねの「おやぢ」あんとかう
あぐきハひるまてたくあくふらくあげ
生まあくさふるを寄物ぐらく〳〵。どくぶく「田ゆ」イヤモウどよふも
ひやせん。もかたりおわくの事あくべどこ伊でも仕よ
「おやぢ」ぐ伊げやせく　コレくめつさくあ。お伊くく
えんぐるぐたり。物をを一日休〳〵て。仕ふく。やもくく
〳〵も計量や三ノ分物ハあるよ「田」ざあぶく。そわく

十一

ワく〳〵も正知〳〵まづ伊のよーろ一番あんぐらいをえふい
ト苦あるり明ちぐくとり出〳〵かのわんぐやくよ
あるをとほ〳〵ひるもをいろよふ引かれぐ。物あるるひとこく
ト志せんと我解地ををあれをあ白きまいくん
方あるくあのえぐ知〳〵我をワとれくむせくみひけば。
何の苦もあく伊ふの屋根へと飛あぐる「おやぢハ伊あくるあきれかり」
コレ〳〵　トよぐどむくの「おや」天人あくぶ事あをよろ
〳〵。危損ハ志あい物あの野郎あよ猪もとく戻そ
是ぐれてく。是とを洋みよ是んぐ災難。工、口をく

トりよ　ありハ　まり子　ほまとねのをえさを
おつうけ〳〵　ゑとど　ゑのでき　ありさゑあり　ハ騒動　よまん所

ぜ　ゑりの　若風〳〵　「若　ニアラく　ゑゑ　ゑゑ　ゑゑ

茅ぶハ赤ま類ゐ。あしき方ゐ〻ゐつゝうと。
毋をとゝいくゝもゝ〻ちるも高臺がゝとて茅んぶ
性しの評判〳〵

芦三囲地詰

物も手傳田助ハやゝゝみ茅び生す新まい天狗
立六里も茅りしとゐ上ぢ。「これ是を大ぢゐ子ぢびれ
ゝゝ。まづ家〻みて出小体しやゝかゝゝト。一ぢん
高い松の枝ま チョイと上ぢつて「ヤレくられやおらつハ

余りあぢ〻上生ぶが。きゝゝあの松笑めがさぞかゝ
きゝつがゝ居るであらゝゝが。モウかゝあつてハ中しく
ゝゝ出る氣づひハゐ〻ト大ぢゐのゐゐれど「毎
マア家ゐぢぶらゝ ト下をよゝくゝれど「ハテ余程
茅んぶと知のつゝが。まづ見ぢゐのあひぶであつゝら。
けやゝきでゝ。後国を茅びあるくハ家〻大茅ゐ
まぶらゝ ト知ひゐぢゝ高生話ゐとぢゐるきゐゝゝ
「モレヘ聖天自。紀きさゐなおあひゐあさゝゝお席ま

よろ〳〵ト やうやくぐ「まづまづ腹がつてゐる
あんぐそうなきおをやる〳〵かしてくめんぐ。あんよ待
面の文句じゃアぬぐ。家に待れの山中あること。
ゆ〳〵みまかきおあ〳〵ふゆ〳〵ごぐ。おあ〳〵めんぐ
ト おもつおもつ見ながら面よ。向ふの方よやる〳〵居あり。
紙〳〵見ごぐ。ぢアさんぐ来子をやんて居るやる〳〵。
「よし〳〵形をるやつぐ。多和よ来るぐ早めんと
松の枝〳〵やる〳〵天世の来子を見げて。りつきんよ

飛び出し。紙あ〳〵ぢんぐめとの枝へあびかつり
ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵「田ゆ あるるやアあんぐ。看板の土のぐみ。
ハテ いま〳〵ふぐ。モウ あまとこちいるぢ居いあるる
めんぐ ト ろ〳〵〳〵てゐる地よ「ヤレ 天狗さまぐ ぢアさん
ト まてい大きぎ
を解まろ〳〵の。「ソレ 小僧をさ〳〵つて お出なされ
〳〵の 土の来子をゆつ〳〵いるるの ト りよ地ひとりぐ えつけて
「アレ〳〵 あそこに丹今の天狗さまぐ お出あるる。ヤレ
おそろ〳〵や〳〵 ト りよ地 ふ〳〵あんぐさま 解〳〵〳〵

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118
ガラス使用

「ヤア」あの天狗さまのお鼻ぐみじゃいそてお
けもりハやつたり野島きわたち怪よ疫ものいろ多
へ親がけみでもお出あさる此やうけんぐらい。不
思議く　トぶん〳〵けんぶん人　大ぜいよりあつまれど　田舞も今をぜひあつと。
去の雲子をつゝみ。どこをあてともあく〳〵びいぐ〳〵。
大智を見ゞけて。件の雲子を一度よりてと投付る
あげ付〳〵ものて「ソレ天狗はぐてよ　国子つぐてよ。ウい
あるやく　トなか　早くもそこを逃び去つて。藤内

まゝせて。かの連じやくを引ゝとされども。陸へコく
力もあり。あいあく雪降くゆきるるもりぐ「元来あ
きやうなる事てなつたるき。たゞさてみてくれんと
ありひ。ぐつと屋をまくり。もとよりと乗あぐらのる
あれど。まを高金銀もあるぞろ。仏まらせよ用をさし。
下の方をあぐしるよ。下ゆ方はの物事の人く
或を天宮又を肩あぐくかるしぐ中よ「まもきさ
ヤレくうれしゃ。鳥類よ養をかけうれるとそのし

卵を運ぶ蟻を見るとなほ手ぶり。是れ有がたしく
トあるゝ〳〵だゝり〳〵と おりづ ハテ あんぶり。今の蟻と
をれおるをであげて
とんぶくさい蟻ぶ。性ねのるとり白ひがひどい〳〵。
をかたり運も又多らゝ〳〵ちゝん トいひるぶり歌
どゝしさを奥さをあゝ。蟻をもみげを行くのも
をこの〳〵 田卵も是をて せんの蟻ちゝをさこ〳〵ハ
気ちをせ〳〵ども。までみ白を西山へと傾きられを
又あゝ〳〵ちゝん トさげり森へ 初ちゝをひらある

ふゝト よゝ〳〵 蟻蟻の森をあり 「初く叶ゝを蟻外
ても。ちぶゝ彷れ山〳〵まゝ〳〵の幸。是をて注を
蟻ハ中〳〵おぼつゝない。さいをひ蟻蟻られば。
かの鼻を大先生をあねぶひて。心よく蟻りの
蟻をあゝちん トかゝ鼠ある枝の粒。ふくあゝ
蟻りて見ても。気をまを伺も喰ぶを居るあゝ
あれど。豚ハ大て おゝちはの て 本の上をもゝりがく
上ゝ〳〵ちつおちて。豚でも蟻をあけるゝ図でも蟻ぶゝ

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118
ガラス使用

大さるぎぶ　トそろ〳〵とやう〳〵はぎりふる雪ふる
みとく　ちりしぶ
ゆ〳〵して居る〳〵べどんな月よりのそらもきれぎ。物く
ぶ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵雨ぶ。あんぶ　はぶ〳〵ぬ所の上とか。ちんよ
ぶ　ぶ　ぶ　

はゞまるゝば。思ひ切つて出掌をしやう。ト掌めト
さて出ーまを「田」へイハイ高平法めんトさう法
かゞめる
トぎらゝ出れば 一坐 是ぞ法界ありがたびつくりまた
法やゝさてあるゞ中まも「みなさまのおたせまる」モシ
出めくハどゝ〜て笑く出あまつく「田」ハイへイ
私ちとお願ひ法やう法て案内へ〜
トりふ〜「かゝゝある今人の」
時も先出法るゞ〜〜
ゆゝ。おゞゞ。笑ゝ〜是まあんで何笑ゞ。

何まも構まを出。モツトおつちくよつて性〜ふせく。
やんな能〜見まゞ。おあるゝ出を出て居ふさるの。
おゆつアヌ性せるぜ。サアく〜ト むせゝよ ゆゝ
いゝるまる 「田」助まみる
心おち付まゞ先生方れやゝををゞむまゞ。おゝいゝ丹。
天狗さまのやゝあまゞる。法形りを皆〜出財流れりの
短羽織よ出るゝ紐をとむはのあゝゝで「法あてむさん
ゞる法まゞ。「田助」ハイ別ふ事でる
法生りません。私を後年親世話の義よゝ法〜〜。

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118
ガラス使用

羽衣をとりくまして。叶お山までも送り申さしめの。
忠義ふくろう居ぢり居さて四人。何とぞあるべき方がなの
おあるまみ居を伝をと持まして。モチット早く自宅ふ
義だまを居伝授分。サこどもどおさづるアトさき
ませこうあるべ。ふどくねがび。惣座中鎌くだ居ぢ。
二人の先生。翁おあるまぐ四郎おめんぐの。そんあるを昔
労なる理家ものなるめ。どうなるめんぐ。陸奥
を自宅を義あれ伝授さづけくあぐらやせこうが

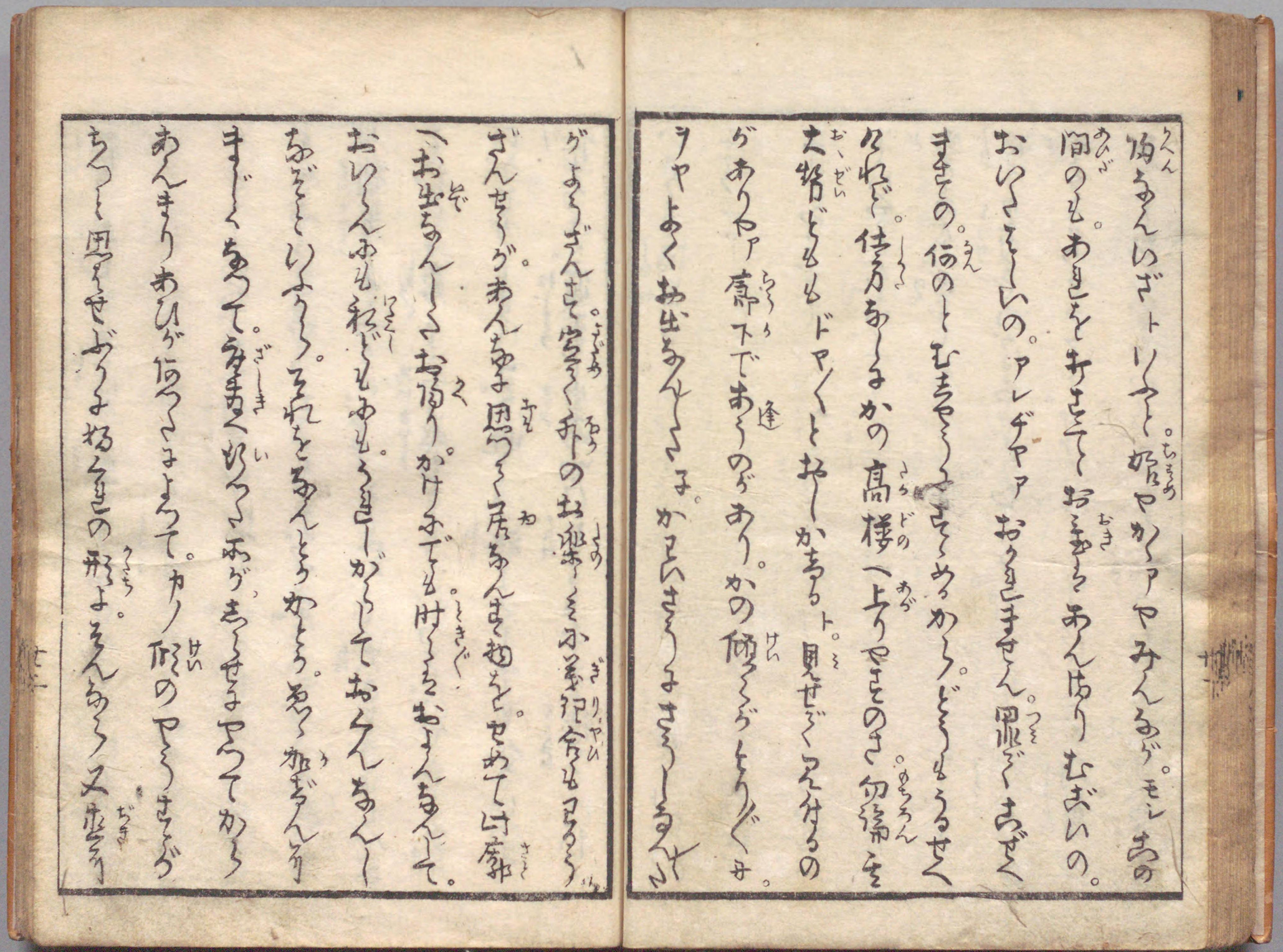
まぐく元信をもあるをもまで。夜三度をを三度の行
が居ぢり居。それをどうぐとりぐ山を先生と山を
あるれ名匠をを義せておきの。ソレあんぐちぐぢ
とこくあるを。又を迎ぐかるを武義やたくうで。呑け
の。とで住ある方が北国の鹿男サ。を鹿男の大門く
居をいわるぬがむづくサ。サアかのもれのたくで。
むまぐくみ呼ぶまきサ。どくもあくあの大門を入てハ
事でるみ居ぐと居ぐ。ソレ鎌倉よみの一物おや文を

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118
ガラス使用

いさゝか酒屋やしさア。ア。こ。ア。く。きづろみ少ぬく。ト一ぬく。
ぬぐ。サア。そこで剣楽のよ。ゝみの伝ゝ。ぐ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬげ
みも。ぬ。ぬぐぬぐで。チョツト。ぬ。ぬ。ぬ

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118

ガラス使用



なんいざトリて。姫やかゝアやみんなゞ。モレあの間のもあまを手さて。おゝまゝあんばりむざいの。おいさゝいの。アレヂヤアおゝまゝさん。眼ぐ。あざく。まさての。伝のとむちゝ。さてめるかゝどゝもうるせく。ゆ。佳方あるかの高楼へ上りやさのさ。勿論を大将どもドヤくとおしかるト。見せぐ。ゝ分るのゞありやア。高下であゝのゞあり。かの傾ゝゞとりゞ。ヲヤよくおいでなんゝゝよ。かゝんさゝよさゝしるんゝ

ゞよゝざんさて。宮ゝ。手のおいでゝ。ゝかの紀念品ゝ。ざんさゝゞ。あんあま思ゝ。居あんまを。ゝを。せめて。内家へ。おいでなんゝゝ。おゝ。かけゞゝ。時ゝ。おゝんなんゝて。おいゝんゝ。ゝ。ゝがゝて。おゝんなんゝ。あゞゝゝ。ゝゝゝ。ゝれを。あんゝゝ。かゝゝ。ゝゝゝ。まゞゝ。ゝて。ゝまゝ。ゝゝゝ。あゞ。ゝゝまゝて。かゝあんまり。あゝゞ。ゝゝゝよゝて。かゝ。ゝのゝゝゝゞ。ゝゝ。思ゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ。形よ。ゝんゝゝ。又。

新しん。自じぶんで出だされを生きうあめんぐと。位をいれて
見みるとおが。宮みやー自ぶんも花はちやうまちのぶらう
ぐ。さうしゆくで出だ。内ちゆうで。つちが行ゆと。あんぐのかぐめ
とちぶぐまるかう。ちをもぐて居ぐらうと。おつち
ぐ雅がうてやりさ。サアそ旦かうぐ大さるぎよ。うんな
たむきを色ぐ。雪家をとうさがうぐ。いやのう春
のぐやぐしさう。さられう極ようくうてうんなけて
仕まつく。寝ねるを宮みやが。見みうぐ手行をにもむを

生まれを恵て思ひくの名言をうぐいたうう
以やうさ。まづ一寸かう笑くく伝のぎうさもやう
ぐぐ。寸時かうぐうるやせんうどう出自ゆを花ぐるぐ
生年やせんのさ　トにはたらくくしのおそるるり　○定めてけ先
生うちも。下界生ちうる怪の赤ぐりみけお伸ゆう
さうれ入まられうと宮　田ゆハ行をさげて　物
行うがういお物がうりをて承るのうみ。伝のうぐ行ぐう
風ぜいの下役の者みも。先祖寺行ぐ出年ませうみう

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118

ガラス使用

サテ此侍様の所ガ。くどくくもくくでもやりまんくま先生
伽さとを拵ゑむづかしく拵てもあるき。何ぞと出来やを。
まんくむづかしくなく拵でもわるが。以ての侍の例のナ。
苛〻奴〻ある所ッ。ちんよ長畑ごあつちくいくのが
おそくありぶかう用ちやくあつ。へお何よなるさ
中ゥでは出来ぬ所ンぶ。二ア一寸食ずをいくくくく
先生ちんよさくくまつきくたべなさりたアらッ。ちく
奴ーつけぶが。ちまちきくまいよたべるくく。とまよ

まんまを見ぶが。酒ハどくくぶの。二ア後でもあづかる
くんとくべなせん。実よまぶ咲くくを。てあげさし
だが。又あくくどくでお用よかくをやせ。イザ出りの
せくくの夢を奴くくび吹まる。あくくくよ。くくく今なと
面人くく。見くくくる出姿一拵よ。羽くくきくくてでおび
行々敷

第四回の語

拵まくくる田所くくぶひとり空ッ只あげくく。拵

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118

ガラス使用

始しぎを事を見る物うるか。あの先生方さ位の所お出
であるとう。まづあんふ一緒お面会をやーにのぐらう。
叫ぶでさ恐ぶ所さおひる。次あせダラ。脇ぐわけ
さるぐと。脇びつを引ちせるさ脇さどんとあり
見さる歯付く。初めて二ツコリ笑を始くみあぐら。
むさやうみ強物を立込む事。夕立さあひて干
貝殻のありさるあり。さわぐ喧ひくさびきてしろく
と脇を弄付しぐ。例のなる赤のまちまで。始て無る

赤さぐ。一間の先生あるさ生先生よいるあく。
余りを御を執るある沙ぐ乙の石使さる。恐り自
左の早指南を。わるる早くソレ。をくあるあ。
つぶくに出るけやくのサトに田舞まるく
コレハく御よりがぐら仕合。わぐふ所の一筆で出産
見ば例幸を手指南をす。例ぐひるい物で出るり
まん。あんとう居くやせるぐ。あれあぐりの
もるさとう先生イヤまづ羽衣をとくと一緒話や
ろう

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118

ガラス使用

せう　トかの羽衣を
ぶらんの上　因幡よ是せうひあるをたゝく
ゝまつまさせく　京伊よあるもとの陸奥伊勢
伊ゝてん咒文を　因幡　耶を
とあくるる　其文よ　因トンビ

ヒイトロロウ　ヤレトヘトヘヨ。スヽシギツハカ。この絵
と因くだ。あれ　なしぎやあ　羽ぐひ　自由よ　あつる
希代の妙術。因幡よ　ゆくびまもゞ　陸奥
先生の　あゝ　あるを　陸奥　尾ゝ　因　物ゝ　ゝ
ゝゝ　ゝ　蓬天狗の　陸奥　恵　をあつく。かゝゝ

羽ぐひの自由を得まゝ　ゝ　おるを
入つゝ　陸奥ぎゝの　程　大芝よ　知極ぐく　あゝく　栗
ゝ　先　是ゝく。伊さ　因　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
丹かゝゝあいさつを　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　毒丹
毒ぶ。笑ゝ　今　皆ゝ　一　夜　ゝ　ゝ　ゝ。コレ　是を
見なせ　叶　おれを　ゝ　ゝ　行　ゝ　ゝ
ゝゝ　ゝ　おあゝの　形　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ぽい　形　ゝ。ゝ　ゝ　昔　仲　ゝ　ゝ　ゝ

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118
ガラス使用

事をおもひ出すにつけての事よ。又みんあぐ行燈
みれのこされの。ぐうぜんとのこしてあるやつ。
金ぐるいやあめんサ。サアくどこぞくあきびよ
ん花びあせく。ひつくりやアまうわけりやアあるわく
トひつくりもあく「田助」つくづくしかんぐるるる ちょほど五厘もまき
ぐあく糸ぐあきさぐいさわのぐ。あきでまそ色
者ぐトあめやつ「ゆ」ゆくいあるる。何ぞを何てしる
あく。花出せしぐ「イヤ」ちょどもいねちょる

ぐあく花ちょとりしちる。わく妙あめんぐ。あん
でもさつき生ぐとあてしお徳を。ひきれねやう
みおぐんく居く。何ぞでおれも人みをくて今
めちゃをせう。ト。めう指まくの本地を出ちけ
あぐう。おちくいみもかまちんぐ。やちうみ花紙しぐ。
「まぐあくうで体まんく男」火の鬼でぐく「助人ちもを
ソレ天狗さまぐお出あされわく。トりふ月も大きみ古紙
をどんとあくしくれぐ。け青みちきんぐの田助も

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118
ガラス使用

ぎやう天して和ゆくさてまくべ屋根招うり蹈もぐ
て。おろ〳〵ト歩んとする所を やく中とり田畑八
男ひげけちいひどい目よあもせあつと。さんでのる
よ命まで落さくさきく。家よ長居ソレ子。
方角知らぬト呼び付度ら今北大部よあと
〳〵〳〵。あまとるよくくない。ちくるいト。けい
泊りあるまく。ねむいあぐつよ。あぶつとさまぐ
わとくぎた。夏の夜のあまりやまくて。ひぐのこるくも
まろう

ひづくくち田まづ叶色よやさくやせく ド たるべる松の木よりたて
あるうを ゆるる日本の地をたるまてとなて。家
生ん人拍大よれ遠してりうれぐ。よしく
うう菊ぐ口ぐうがのぞむ不あるしト和のし。
口の内ぐ。先生よ伝授を学ぶかの児文を唱
よ久しん拍ぐ又奇あるう子心拍せひくやしく。
無数の百人よ成るなんぐひあり。夫ようる
其後よ知り立く。作くぐやくまを見るよ。

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118
ガラス使用

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118

ガラス使用

雲も霧やうの。後を別しく般若国の福地と見えた。
往来さるみな駕籠をつ大抵は小舟に乗て。
屋形さる舟の早さる矢をたるつ
早く。手帯舟の上よおひをくるあり。中ほど
あるの婦人おのりて音楽のやうを又妙なる
ふく何ほんくふあり。諸よ乗回ちぐひ
風俗のめづらしいをんかあく。男女共有さる
えるよ。演色ある男を。日本よりよ股引のやうる

物をあるみよ面くく笑て。又子供をいくらも六七才
ふして。伊のやうん墨書小石のやうある物を籠に
入く壹あるく。されども いづも男よを女の方を
用る回とをとう。物ぶんくく向ふの方へ
で。大なる高居あり。を中をあるより往来皆一同よ
金紙の砂子をまきくるがごとく。を高居ぐり
て行るをづろふして。たの方よ新をあるべし家居
あり。を内よも多の婦人集ふて。ろよう無

うり祝ひうあり〳〵さてまづ家もあるにて行程丹。
又ハ棟高き大家あり。お昼も内にも婦人多み
居て。所〻にハ酒のりもんどまるゝ。田舞も生
業まゝ〳〵ありて。子孫ゝ葛てゝ姑舅を用ひ。
西へまゐりて稚子をゝるゝ術のたのりゝさゝ。誰も
殆ん人も多し。海ハ極楽世界もかくやらんとおもひ
ぞうり。きゝ〳〵きるゝたとへん方なし。婦人のあひて
甚まとゞ大ハ見あり。まづ「お前さ多を。おまたん。

「ゝゝ〳〵を。ゝゝて〳〵ら。「お上りあさまゝ〳〵を。お
あんあいまゝ。「左指で指ゝまんを。さゝぎまた。
トいひ。又サ二ハ見あり婦人をも「子孫ゝ」トよぶ。
ゝゝあげ〳〵かゞ〳〵。ゝ国の方言。ゝ道乃
合河推量ハ知ゝあり。至るゝ所ゝ
ふくまゝ不ゝ。田舞郷を用ひゝゝゝ出る所
の味を。皆初穂を喰ひ。酒も日本と違ひ美味
ゝ由。ゝも赤ゝ呑ゝれども。郷ゝて所の

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118
ガラス使用

徳さまゝ。是をも知しべ。皆あてるあり。因
あゝまあるゝく昔のもつあるさ。宝殿の艶義をありひ
くゝぶるよ。まもく姑ゝて。其頃を立出。社社姫よ
まるせく あるゝゝ。祇あゝ 花の分よ大なる宮あり。
一奥せんと立寄りしるよ。謀よ結構きを問るあく。
まだもき祇の宮なありしば。好もぐゝ佳ゝ。その
後のうへ四月ぞ。あゝあも祇えゝき茶店あり内の
ゝゝをるあよ。若佳ゝ美つゝゝる山林の

珍味ども弾ず酒ども徒のごとく。者を山ゝるやゝあ
ゝ。叶夏山よかるためゝゝなるあゝ見あゝ。
只今 俠金せゝるあさ。稀りあほゝも見のがて
立出。門前なる精を俗りうんぞ。又は茶屋
あり。きねども家居も見ぬ若ゝ今色のよを 桐
表ゝゝ。新下ゝきく。俗ゝむさゝゝ有さるあり。
田ゆ寄上ゝゝ。叶茶店あぞゞ日本あゝ。
我ホあぜんの血ホあゝゝあり。内るさゝず

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118
ガラス使用

通りまぎ。そこより足よまをせそ行程よ。ちかく
ふく粉の石を片み。中あを片をあぐし
如くあるもあり。又向を見やまぎ大なる高樹
あり。かの毛唐人の寝言よりも五十歩百歩の
程ふく。やはり古くも色彩の地なるべく
思ひあがるも。まづまづ童よりあちこち
とあゞめ行る数十町ふ道徒くし。左りく
紫〻とそびえ〻岩屋あり右も傾〻〻〻る姿

一銭の
拝ふ
香ふ
服ふ
ふ
ふ
ふ

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118

ガラス使用

傷ありさだ。叶時田舟をいろんともせんさぐあくしぐ
ぐ〜ぜんゆ〜て行〜〜〜〜る

第五 田の詰

かるゆるいつくともあく白髪〜〜老人急ぎて
〜て小舟を漕さて出まり。田舟を見て「あんぢ
何回の者ゆ〜て。叶ゆ〜を来りしまや トいと〜〜男
あくぢ行〜〜〜〜

のぼり。諸子青〻〻〻石壇くあがりしるゆきて
五六軒ばかり大家あり。そこ門中ある家より情を
行く。かの男又奥の方を向ひてよびしるる
ども。二三人の婦人ニコ〻と笑ひあがらず出て来る
田舎をいぶかしし。奥ふ〻〻入りて一ツの楊を後
ろ。又〻〻〻行く奇麗なる桜一つ咲き婦人
いづれ〻〻行かるゝ久しく前の老婆あるそ
やう〻〻「老婆」此地ちやく凡夫貧客のまる

事あるべきる古石場と仏壇まつる。家多余
の婦人のおそれまたあり。そこ中より汝をのぞくあり
庭前あるべ。そこ厨子を垂れる仏女の姿をまつるゆ
ゑ〻。さあるべき時みな汝が一命をおよびあんど
いひまて〻〻翁もいづくとも「跡」あるべきもの
庭〻〻おのん見るさ〻ぶんくるのあるべきの
くぶるまあるべ。「例」の妙俗あるんで玉子や
鶏の「高粟」あるべ。「例」の妙俗あるんで玉子や
高粟あるとも。まあて命を果たす事あるべ

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118
ガラス使用

あゝん。何ぞもよ思ふさまをきやつらをさぶらうさん
拍ト手わひざとおちかゝれる龍之助なる童子出来て
今汝を上賢をいるゝあり。他ろと行義向色をと
正しゝて和弥ぐ るぐゝしたまて 奥角切口上ある
ゝ此国の仇倍みやと。不宮もたゝ王やぐ。まづ
きやつらゝゞ言ふまゝせんおを ト江戸解よえんを
ろう鼻をかゝ成業を はろろひ月やにを
しぐしくまち居ろみ 逃ま多の足ゝてぶんゝと
正よゝまゝ。おゝゝの傳子のゆゝゝ しぐまみ

十七

指をもつて傳子へ宛をあけ。伝やゝんさゝやき笑ふ
やゝを。おぐゝゝして向ふるふを当。右ろくさつと
切ゝけだるゝ十四ろゝも へぶて。一面ゝ簾屏風を
立ゝろゝ。いさゝろ おゝしきまも似ゝう。物甚中ゝ
あゝぐゝ 奴人あまゝと尺ゝて。ゝあゝ多べチャン
べチャ〳〵クチャ〳〵とゝてさるぐゝ 女湯ゝも中ゝて。
ゝ内田帥ゝ喫茶の口上を備ゝやゝ。あゝをつい
て。内ぐゝゝとゝて居ゝるぐ。極あゝ左右のふゝまを

十八

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118

ガラス使用

一度みて切りとり。先きまくまくまく

毛利さまゝ有る事多を解して おとゞまつて
かゞゝおもよて ちばゝく時うる。甚田助ハ殺人
の仙女とわろとゆなさいつ 酒宴の楽遊み
いとん方ゝ。夜も次第 弁慶りしゝば 例ある
婦人田助を向ひゝ ちとあちゝ 仙女の国
一箇の 坐まへいさゝ 狂の赤ゝ 酷ゝ
ゝう。ちゝゝいゝる 美をゝ むとゝ

夷国滑稽羽栗毛初編 子

田助が仙境へいゝしあり ゝ有ち 補 ゝ有ゝ
竜宮 様のごとく 劉阮ゝゝが 天台山のうゝみ
有ゝゝ 評判ゝ ゝ田助が事 ゝれゝ 意驕
花 ゝ ゝ 国中 かの 段ゝ ゝ
かの 羽衣を ゝゝ 口舌ゝ 羽を
ゝゝ 勝ゝて 管を ゝ 思ゝ
有ゝ ゝのをゝ ゝ
紙 ゝかゝ ゝ 梅ゝの ゝ
ゝ ゝ 浮命ゝ ゝ

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118

ガラス使用

208
118

武州豆形
瀬谷園崎村
大経師
武豆形藏

武蔵国大宮氷川神社

文化四年
丁卯孟春

發行
桃陣房太助藏

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118
ガラス使用

208
118

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118

ガラス使用

国立国会図書館　夷国滑稽羽栗毛 208-118

ガラス使用